

JSEKM The Japan Society for Electronic Keyboard Music

日本電子キーボード音楽学会

第 17 回全国大会

=オンライン開催=

抄録集

主 催：日本電子キーボード音楽学会

と き：2022 年 9 月 4 日、11 日

ところ：オンライン開催

目 次

◆2022年9月4日（日）

◎ <u>基調講演</u> (13:30-14:30) -----	4
城谷 正博先生（指揮者・新国立劇場オペラ音楽チーフ） 「オペラにおける電子オルガンの活用とその可能性」	
【電子オルガン部会】 (14:45-17:30)	
◎ <u>ラウンドテーブル</u> (14:45-16:15) -----	5
「楽器から見る楽譜の変遷」	
話題提供者：	
岩井 孝信（聖徳大学） 「楽器から見る楽譜の変遷」	
三宅 康弘（上野学園大学短期大学部） 「絶版になった電子オルガン楽譜の入手法」	
◎ <u>研究発表</u> (16:30-17:30)	
1 西岡 奈津子（演奏家・平成音楽大学） -----	6
「電子オルガンとスコアリーディング～オペラの現場を通して、楽譜の形態とそれぞれの活用～」	
2 阿方 俊（平成音楽大学） -----	8
「アフターコロナ エレクトーン復興ビジョン - I -持続可能な SDG's 普及を求めて-」	
3 五十嵐 優（株式会社 Orinas） -----	9
「クラシックオルガンを用いた管弦楽曲の演奏～PA から見るオーケストラでの実践～」	

◆2022年9月11日（日）午前の部

【電子ピアノ・ICT部会】（10:00-12:10）

◎ラウンドテーブル（10:00-11:30）-----10

「デジタル時代の音楽教室をソウゾウするⅡ — “シンカ”する学び—」

話題提供者：小梨 貴弘（戸田市立戸田東小学校教諭）

内容：1 令和時代最先端の教育現場をレポート

2 進化（深化）した学びを体験するオンラインワークショップ

3 ICT活用クリニック（お悩み相談）

◎研究発表（11:40-12:10）

1 赤津 裕子、鉄矢 千絵、仕入 順子（竹早教員保育士養成所）-----12

「保育者養成校における『音楽表現』のカリキュラム構築に向けて—イメージに
あった楽曲アレンジの授業から—」

◆2022年9月11日（日）午後の部

【タテ線・ユリディス部会】（13:00-16:00）

◎ラウンドテーブル（13:00-14:50）-----13

「すべての人々に演奏の喜びを—I —その問題と解決策を探る—」

タテ線譜、ユリディスの紹介

話題提供者：坂井 康二、石井 良弥、阿方 俊、西山 淑子、齋藤 康之

◎研究発表（15:00-16:00）

1 阿方 俊（平成音楽大学）-----15

「タテ線譜メソッド」の考え方について

2 橋川 琢（作曲家、季刊「音楽の世界」編集長）-----16

タテ線譜メソッドの音楽療法上の意義について

3 小出 英範（東京情報大学）-----17

演奏を容易にすることを目指した新規な電子楽器の製作 -従来の楽器とは異なる演奏インターフェース-

『オペラにおける電子オルガンの活用とその可能性』

城谷 正博

(指揮者・新国立劇場オペラ音楽チーフ)

近年オペラやコンサートの上演の現場に於いて、電子オルガンを使用する機会に多く接している。当初は電子オルガンの可能性について全く知識がなかったため、初めてその音色や奏者の能力（スコアリーディング等）に接した時の驚きは大きかった。私の勤める新国立劇場での業務のお話から電子オルガンとの出会いを、まずお話しする。

城谷が指揮を担当している秋田県能代市で2021年より開催されている「能代オペラ音楽祭」では、その開始当初から電子オルガンが導入された。オーケストラピットでのオペラ演奏のみならず、バンダ（舞台裏のオーケストラ）を演奏したり、コンサートではオルガンパートを、また弦楽オーケストラと共に演で管楽器のパートを担当するなど、様々な形態で電子オルガンが活躍している。

2017年5月にはじめて新国立劇場の公演に電子オルガンが導入された。演目はワーグナー『ジークフリート』。大劇場の本公演の関連公演として日本人歌手による抜粋公演が行われた。その導入の経緯や公演までの道のりは大変興味深いと思われる。観客からの好意的な声、そして電子オルガンそのものを全く知らなかつた外国人キャストが驚愕した様子などもお伝えしたい。

その後『ジークフリート』は宮崎県えびの市での再演につながる。オーケストラピットもない500人のホールであったが、電子オルガンを使うことで小規模な会場でワーグナーの楽劇を味わう、これまで誰も考えられなかつた公演が実現できたのである。今後電子オルガンの活用によってオペラ・コンサートの幅が格段に拡がるものと考える。その展望を私の立場より考えてみたい。



城谷正博（じょうやまさひろ）
指揮者・新国立劇場オペラ音楽チーフ

東京藝術大学作曲科卒業、同大学大学院指揮科修了。安宅賞受賞。東京フィル、神奈川フィル、仙台フィル、読売日本交響楽団などのオーケストラを指揮。オペラ指揮者としては2000年『フィガロの結婚』でデビュー以来、多くの作品を指揮。特にまつもと市民オペラ『魔笛』『ちゃんとちき』（第10回、第16回佐川吉男音楽賞受賞）では絶賛を博す。オペラは古典から近現代に到るまで90作品を超える幅広いレパートリーを持つ。特にワーグナーはその主要10作品をすべてレパートリーにもつ希有な存在である。代表を務めるワーグナー演奏団体「わ」の会では多くのコンサートを手がけ、ワーグナー作品受容の新たな形を開拓している。

新国立劇場では音楽スタッフとして1998年以来数多くのプロダクションに参加しており、現在は音楽チーフとして同劇場の全ての演目に携わっている。新国立劇場公演では、2021年3月『ワルキューレ』同年10月2021/22シーズン開幕公演『チェネントラ』を指揮したほか、高校生のためのオペラ鑑賞教室『椿姫』『愛の妙薬』『夕鶴』『蝶々夫人』『トスカ』の指揮を務めた。また『さまよえるオランダ人』（演奏会形式）、2台の電子オルガンをピットに迎えた『ジークフリート』ハイライトコンサートを指揮している。

「楽器から見る楽譜の変遷」

司会：金銅英二（松本歯科大学）

書記：五十嵐優（洗足学園音楽大学）

電子オルガン部会ではさる8月6日に同研究テーマによる研究会をオンラインにて開催した。電子オルガン、ここではヤマハエレクトーンの第1号機であるD-1から、楽器の持つ音色や機能、エフェクトなどを理解し、さらに当時（1960年代）発表された楽譜に注目し、楽器の持つ機能や音色、記譜などの書式を分析した。それによりエチュード的なもの、演奏力向上を目指したもの、機種ごとに作られているものなどそれぞれの持つ目的を分類した。またグレード試験やコンクール、演奏会で使われた曲集、海外から輸入されたポピュラーオルガン楽譜など特徴的な楽譜についてもそれらの音源資料により電子オルガンの独自性のある演奏表現についても確認を行った。

今回のラウンドテーブルでは、そのような楽譜について歴史を振り返り、自己に影響を与えた楽譜やアレンジなど、その楽譜の特徴と共に意見を交えたい。またアナログからデジタルへ、そしてシンセサイザーへと変化した楽器と共に演奏表現も大きく変わり、一般的な音楽そのものも変化してきた。そのような変化による電子オルガン演奏スタイルと近年の楽譜について、楽譜から得られたことや与えられたことなどについて意見を交えていきたい。また電子オルガンの機能の把握や音色作成などの現状も検討を行いたい。さらに過去の出版物を現在どのように入手できるかについても情報共有する。

＜話題提供者＞

【岩井孝信（聖徳大学音楽学部）】

①楽譜から得たもの、与えられたもの

②近年の楽譜から得られるもの

【三宅康弘（上野学園大学短期大学部）】

③絶版になった電子オルガン楽譜の入手法

以上の事項を中心に参加者からの意見を伺い検討を行っていく。

なお、8月6日に行われた電子オルガン部会研究会「楽器から見る楽譜の変遷」の映像および資料を事前にご覧いただきたい。

【Youtube 動画】

<https://youtu.be/n8bIckdH5Ck>

【配布資料】

別途

【電子オルガン部会幹事】

赤塚博美（洗足学園音楽大学）

五十嵐 優（洗足学園音楽大学）

岩井孝信（聖徳大学音楽学部）

金銅英二（松本歯科大学）

三宅康弘（上野学園大学短期大学部）

電子オルガンとスコアリーディング -スコアと演奏技術、2面からのアプローチ-

西岡 奈津子

はじめに

筆者は2022年5月に、音楽専攻学生(電子オルガン、指揮、作曲など)や専門家を対象とした「オペラスコアリーディングとアナリーゼ」※という講座を開催させて頂いた。

※2022/5/25 主催(一財)オペラアーツ振興財団

この際電子オルガン伴奏によるオペラ公演は各地で見聞きするようになったが、実際どのような楽譜を使っているのか、アレンジはどうするのかといった質問を多くお寄せいただいた。奏者以外にもこれに関わる人々に楽器や楽譜のことを知って頂き、より電子オルガンが音楽界に認知されればと思うに至った。取り組みの一例として執筆中の論文から口頭発表するものである。

(1) 現場で使う楽譜、その選択と特徴

現場で使う楽譜の選び方。実際に現場で使用される主な3種の特色、利点・難点を考察する。

1. ヴォーカルスコア

利点…骨格がひと目で捉えられる。ピアノで弾くことを想定されているため、鍵盤的なアレンジが施されている部分は演奏しやすい。
弱点…ヴォーカルスコア自体絶対的なものではなく、フルスコアの音を可能な限り拾い集めていることからかなり演奏が厳しい箇所も多々ある。

2. オーケストラスコア(総譜)

利点…情報量の多さ。アレンジ譜ではミクロな視点になりがちだがスコアではマクロな、全体を俯瞰して捉えることができる。

音楽の3要素(メロディー・ハーモニー・リズム)やパート間の関係性が「模様」としてキャッチできるのに加え、オーケストレーションの濃淡が視覚的に飛び込んでくる→音のテンションがスコアから感じられる。また、指揮者と共に

の言語を持っているようなもので、意志の疎通が平易。

難点…移調楽器が困難。(特に異なる移調楽器の同時読み→フォルマシオン的アプローチ※)骨格を把握するまでそれなりの時間が必要。

※7種クレ読みの実用性、ソルフェージュをダイレクトにスコアリーディングに活かす

3. 電子オルガン用3段譜

ヴォーカルスコアやフルスコアを研究した上で、電子オルガン用に作成したもの。演奏のし易さは一番である。フルスコアのテンションを3段譜に落とし込むには工夫とより深い知識が必要。

利点…演奏自体は譜面通りに弾けば良いので、負荷が少ない。(演奏とレジストレーションに集中できる)

弱点…音楽の全体像が掴みにくい。

(2) 演奏面からのアプローチ

1. レジストレーションの扱い

ここではオーケストラの役割を担う場合を前提とする。ただし、オーケストラの「再現」ではなく、目指すのは音楽そのものでありたい。無理に完全再現を目指さず、電子オルガンならではの音色、アレンジで良い部分もあると考える。

(例外・キャラクターや情景を固有の楽器によって表現している箇所も多い。その見極めは重要)

勿論電子オルガンならではの豊かな音色、工夫で可能な限り生楽器に近づけるという方向性を否定するものではない。ただその面だけを追求すると、楽器先行の音楽になる恐れがある。奏者の意志のもと、必要な部分だけ活用するのが効果的ではと考える。

2. 音色+奏法で近づける

音色に加え奏法で固有の楽器らしさを表現するというのも重要である。音色を持っているからこそ、その楽器らしい奏法を疎かにすると大きな違和感が生まれてしまう。音域、プレス、発音タイミング…そのように演奏するならば、全くのデフォルメとして違う音色を選択すれば違和感は避けられる。設定一つでどんな楽器も、編成を変えることもできる。それには弾き手の意志が先行しなくてはならない。

特に、オペラではその場で臨機応変に対応するためにも、余裕を持たせた音作りが適しているのではないか。

舞台は生(なま)物であり、電子オルガンは生楽器ではなくとも生演奏であることに間違いない。ドラマと共に作り上げる一員として、呼吸するように・歌うように演奏できる楽譜やレジストについて研究を続けたい。

アフターコロナ エレクトーン復興ビジョン —持続可能（SDGs）な音楽・教育を求めて—

阿方 俊（平成音楽大学、APEKA）

今年はエレクトーン（＝ヤマハブランドの電子オルガン）誕生から 63 年目になる。筆者は誕生 4 年後から、国内外でこの楽器の音楽・教育分野と共に歩んできた。ここではその歩みを「企業主導型」「企業協賛型」「音大協力型」の点から俯瞰し、今後の持続可能な方向性を考えてみたい。

1. 企業主導型「エレクトーン教室」

電子楽器は、伝統楽器と異なり企業主導型で普及されてきた。ヤマハでは、エレクトーン誕生 10 年目の 1969 年に幼児科に続く成人対象の「エレクトーンメイトコース」をスタートさせた。このコースの特徴は、グレードシステムやコンクールなどを含めたユニークな音楽教育システムとして、アジア、欧米諸国へ急速に拡大していった。

この研究発表では、上述コース以前の一般コースで使われていた「レッスプレイエレクトーン」などから当時のエレクトーン教室の特徴を紹介。

2. 企業協賛型「全日電研」

企業主導型の普及に続いて企業協賛型普及といえる全日電研（全日本電子楽器教育研究会）が 1986 年に設立された。その目的は、エレクトーンによるクラシック音楽の研究と一般社会への浸透および音楽大学・学校におけるエレクトーン専門教育への協賛にあった。

発表では、1988 年、ミラノ・スカラ座日本公演時の演出部長であった A. マダウ・ディアツ氏がスカラ座歌手を同伴してのアリアのテスト録音（EL. 赤塚博美、海津幸子）と日本やイタリアにおけるエレクトーンによるオペラ公演やフェスティバルなどを紹介。

また音楽大学・学校における電子オルガン専攻開設校は全日電研がスタートしてからの 15 年間で音楽大学は 1 校から 10 校、音楽短大では 5 倍、

音楽高校では 10 倍と驚異的な増加をみた。

	1986 年	2000 年
音楽大学	1	10
音楽短大	5	25
音楽高校	2	20

（数字は音楽之友社「音楽大学・学校案内」から）

3. 音大協力型「日本電子キーボード音楽学会」

2003 年に昭和音楽大学の第一回電子オルガン定期演奏会が始まった。その後、下八川共祐理事長から“このようなエレクトーン音楽や考え方は他の教育機関と共有すべきではないか”との発言をきっかけに、2005 年の学会発足となった。

この学会活動としては次の点が特長と言える。

- ・ 楽器メーカー（カワイ、ローランド、ヤマハ）間に共有された研究・演奏の場の出現
- ・ 海外の音大や音楽学会との交流活動
- ・ 教員養成大学の一段電子キーボードによるサイバーオーケストラなど

発表では昭和音大電子オルガン定期演奏会などを紹介。

以上を見ると、現在のエレクトーン需要が 1880 年から下降線をたどり続けていることは信じ難いことである。しかし現実的には、少子化現象、環境変化、一段電子 KB の出現などいろいろな複合的要因が重なった結果としての今がある。

今こそ我々は、音楽と楽器の関係である「音楽の歴史は楽器の歴史」「楽器は各時代のハイテクノロジーの結晶」「現代のハイテクは電子テクノロジー」の原点に立ち返り、アフターコロナとして抜本的改革を必要としているのではなかろうか。例えば産学官連携型オンラインを軸とした ISEKM（国際電子キーボード音楽学会）など。

クラシックオルガンを用いた管弦楽曲の演奏 ～PA から見るオーケストラでの実践～

五十嵐 優（株式会社Orinas）

「電子オルガン」と言えばヤマハが製造するエレクトーンを始めジャンルや編成を問わない様々な音色を演奏することが出来る楽器が中心となりつつある現在であるが、専らパイプオルガンの音色に拘った「クラシックオルガン」と呼ばれる楽器が存在する。

無論、エレクトーンなどの電子オルガンにもパイプオルガンの音色は収録されており演奏することは可能であるが、クラシックオルガンの場合はさらにパイプオルガンをシミュレートするための細かな設定や鍵盤の設計がされている。

クラシックオルガンはオルガニストの練習用や結婚式場で使用されることが多い楽器だが、本研究発表ではPAシステムや大型のスピーカーを接続・音声処理をし、オーケストラの中で本物のパイプオルガンの代用として公演を行った事例を紹介すると共に、その効果と課題について発表する。

クラシックオルガンを活用しパイプオルガンの無いコンサートホールでもパイプオルガンパートのある曲の演奏が可能になれば、会場の設備に左右されること無くコンサートプログラムの構成や楽曲を演奏する機会の自由度に貢献出来るものと考える。

1、クラシックオルガンについて

- ・メーカーと機種
- ・音色・機能・鍵盤のスペック
- ・ヤマハエレクトーンとの違い

2、演奏事例

- ・オーケストラの中での演奏事例
- ・合唱伴奏としての演奏事例

3、PAについて

- ・スピーカーの配置と種類
- ・音声処理の方法

4、課題と考察

デジタル時代の音楽教室をソウゾウする II — “シンカ”する学び—

電子ピアノ・ICT部会

長引くコロナ禍により、今もなお、教育の世界は大きな影響を受け続けています。

とりわけ音楽教育では、歌う、奏でるといった日常的な活動が、感染リスクが高いとされ、活動そのものが制限されてきました。しかし、ワクチン接種が浸透化し、感染メカニズムや治療法の研究が進むなか、Withコロナの時代にシフトし、学校でも、音楽室から子どもたちの歌声や鍵盤ハーモニカを演奏する音が聞こえてくる日常の風景が徐々に戻ってきました。

一方で、コロナ禍の急襲により、文科省が推進する「GIGAスクール構想」が前倒しされ、全国の小・中学生ひとりひとりの手にタブレット端末が行き渡りました。音楽室でも、電子黒板にデジタル教科書の楽譜が映し出されたり、タブレットの画面をのぞき込む子どもたちの姿が見られたり、コロナ禍以前とは異なる、新しい学びの形が生まれつつあります。

本部会では、昨年から「デジタル時代の音楽教室をソウゾウする」と題し、これから音楽教育が目指す新しい学びの形をソウゾウ（想像・創造）することとしました。2年目の今回は、教育現場の最前線で先導的な研究を実践しておられる小梨貴弘氏から、シンカ（進化・深化）する学びの具体的な内容についての情報を提供していただきます。

参加される皆様におかれましては、是非、お手元にタブレットPCやスマートフォンをおいてご参加ください。新しい学びを体験しながら、オンラインならではの忌憚のない感想や意見交換ができるることを期待しています。

話題提供者：小梨 貴弘（戸田市立戸田東小学校）

ファシリテーター：井上 洋一（愛媛大学）

記録・計時：赤津 裕子（竹早教員保育士養成所）

<進行>

- 開会（5分） ······ 井上 洋一
- 話題提供&意見交換（80分）

話題提供・発表 ··· 小梨 貴弘

- (1) 令和時代最先端の教育現場をレポート
- (2) 進化（深化）した学びを体験するオンラインワークショップ
- (3) ICT活用クリニック（お悩み相談）

- まとめ（5分） ······ 赤津 裕子

話題提供者ご紹介

小梨 貴弘（戸田市立戸田東小学校）

1972年東京都出身。

武蔵野音楽大学音楽学部器楽科（ホルン専攻）を経て、文教大学教育学部中等教育課程音楽専攻卒業。

文教大学では作曲・編曲法を作曲家・柳田孝義氏に師事。在学中よりコンピューターを使った授業や作曲、浄書について研究を行う。また、文教大学吹奏楽部に所属し、学生指揮者、ホルン奏者を務め、吹奏楽コンクール全国大会に4年連続出場。

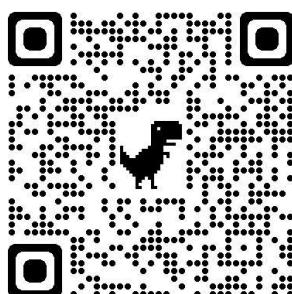
現在、埼玉県戸田市立戸田東小学校教諭。埼玉県内の国公立小学校7校で学級担任、音楽専科教員として勤務。日々の授業や吹奏楽部の指導をこなすかたわら、ICT機器の活用やアクティブ・ラーニング、授業のユニバーサルデザイン化といった、先端の教育技術の実践研究を進める。

主な著書に令和2年度小学校音楽教科用図書『小学生の音楽』（教育芸術社）、『こなっしーの低学年だからできる！楽しい音楽！』『音楽科教育とICT』（音楽之友社）『こなっしーの音楽授業をステキにする100のアイデア』（明治図書）がある。

平成28年度戸田市優秀教員表彰、平成29年度埼玉県優秀教員表彰、平成30年度文部科学大臣優秀教職員表彰。

音楽教育勉強会「音楽教育駆け込み寺」サブアドバイザー、日本音楽教育学会、音楽学習学会、日本電子キーボード音楽学会会員。

学校音楽授業情報サイト「明日の音楽室」主宰。Facebookでは、音楽教員のリアルな日常を、日々、発信している。



学校音楽授業情報サイト「明日の音楽室」

保育者養成校における「音楽表現」のカリキュラム構築に向けて —イメージにあった楽曲アレンジの授業から—

竹早教員保育士養成所 赤津裕子 鉄矢千絵 仕入順子

【研究の経緯】

本校は、幼稚園教員免許と保育士資格を取得できる保育者養成校である。領域「表現」が登場して30年以上が経つが、養成校の「表現」にかかる授業をめぐる議論は絶えない。特に再課程認定において教職課程から教科による科目「音楽」がなくなつてから、ピアノや鍵盤楽器の授業についての位置づけやねらい、内容、方法については、各養成校によってまちまちである。

本校では、音楽知識の理解と鍵盤楽器の演奏技能の習得は、「音楽Ⅰ」(1年)と「音楽表現」(2年)の授業の中で、ピアノやMLシステムを用いて行っている。

そのねらいは、大きく2点である。ひとつは、子どもの表現活動を支えるための知識・技能の習得であり、もう一つは学生自身が表現者として振る舞い表現する力の習得である。

幼児教育の場では、子どもたちが歌う時に気持ちよく歌えるための伴奏をはじめ、身体表現を促すための即興演奏や劇活動のための音楽(音)づくりが求められる。楽譜通りに弾けることだけでなく、場に応じた音楽的な表現が求められるのである。

そこで本校では、どのような音楽体験によってそういった力を身に付けるかについて10年ほど前から「音楽表現」に関するカリキュラム構築に着手してきている。

【研究の目的】

今回取り上げる題材「イメージにあった楽曲のアレンジ」についても本格的にカリキュラムとして位置づけることをめざしている。

本研究では先ず「イメージにあった楽曲のアレンジ」の取り組みの中で学生がどのような音楽的経験をしているかについて具体的に紹介し分析する。そして、カリキュラム構築に向けて、学習の順序性や関連性など学習の体系化について考える。なお、今回の授業は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、オンラインによる遠隔授業で行われたことから、学生は家庭にある鍵盤楽器(ピアノや多くは電子ピアノやキーボード)で授業を受け、楽器のない学生には学校が楽器を貸与しており、電子ピアノを活用した実践であることも特記したい。

【研究の方法】

授業担当者による授業の分析、学生の作品や振り返りから考察する。

【結果・考察】

この授業を通して、学生は次の内容を経験したと考える。

- ① 「曲想」と「音楽の構造」との関わり
- ② 即興的な表現や音との深い関わり
- ③ より良い表現を求める姿勢
- ④ 総合的な表現
- ⑤ 他者の作品からの学び
- ⑥ 表現することの楽しさ

さらにアレンジにかかわるカリキュラムの内容として、1年生では「主要三和音」の定着、いろいろな伴奏型がもたらす効果、場面にあつた簡単なアレンジや創作活動があげられる。2年生ではいろいろなアレンジ方法を理解した後に作品づくりに取り組んだ。これらをどのように関連づけ体系化するかについては引き続き検討していきたい。

【タテ線譜・ユリディス部会】ラウンドテーブル要項 13:00-14:50

すべての人々に演奏の喜びを- I

—その問題と解決策を探る—

和智 正忠

はじめに

第 16 回全国大会（昨年度）のラウンドテーブルにおけるまとめに従い、タイトルを上記のように改めました（cf. 学会ホームページリンク [タテ線譜・Eurydice 部会](#) の資料）。

上記サブタイトルの趣旨に沿い、話題提供は次の自由討議のための情報提供の場と位置付けます。そのため話題提供者は事例の提示に止まらず、施した工夫、その効果、及び残された課題等についても言及するよう努めてください。持ち時間は質疑応答なしで各 6 分間 + 交代 1 分間です。質疑応答の機会は自由討議の場で設けます。また話題提供で言い残したことがあればここで触れても結構です。

当部会の Zoom 会議に参加される方は是非、事前に [タテ線譜・Eurydice 部会](#) の資料を参照され、タテ線譜および Eurydice とは何か、そしてこれまでの活動経緯についてご理解頂くようお願いします。

企画・推進：和智 正忠（医学・音楽研究者）
アドバイザー：嵯峨山 茂樹（東京大学名誉教授）、阿方 俊（平成音楽大学、アペカ）
ファシリテータ：和智 正忠
書 記：齋藤 康之（木更津工業高等専門学校）

1. 開会とタテ線譜、ユリディスの紹介（15 分間） ······ 和智正忠
2. 話題提供（35 分間）
 - ・坂井 康二^{*1} ユリディスを用いた「坂井クラシックシリーズ」中間報告
 - ・石井 良弥^{*2} 長谷工センチュリーハウス武蔵浦和「タテ線譜プロジェクトⅡ」の現状報告－2
 - ・阿方 俊^{*3} さいたま市南区役所 7F 健康寿命延伸のための「ふれあいミュージック」—6ヶ月記念コンサートを振り返って—
 - ・西山 淑子^{*4} タテ線譜メソッドから五線譜への移行の現場報告
 - ・齋藤 康之^{*5} ユリディスの新しい演奏インターフェース_第3ステップの概要と今後

*1) 厚木市民活動ネットワーク

*2) 長谷工センチュリーハウス武蔵浦和

*3) 平成音楽大学、アペカ

*4) 昭和音楽大学

*5) 木更津工業高等専門学校情報工学科

休憩（10分間）

自由討議（45分間）

まとめ（5分間） ······ 和智正忠

「タテ線譜メソッド」とは何か —鍵盤楽器導入に関する新領域の追求（1）—

阿方 俊（平成音楽大学、APEKA）

ここでは、40年近く前のタテ線譜^{注-1}を用いた鍵盤楽器導入メソッド教材発売から現在に至る流れを概観し、その将来性を問うものである。

1. タテ線譜メソッドの誕生と企業内普及

・誕生のきっかけ

筆者がヤマハヨーロッパ（ドイツ・ハンブルグに本社）駐在時に、エレクトーンの教材は難しいので、他社の教材を併用したいが・・・という質問に応えるため、いろいろな試みをした。

・タテ線譜メソッドの誕生

ヤマハヨーロッパの日本人駐在員と現地の人々にタテ線譜メソッドの実験を行い、その有効性が実証された。次ステップとして英国のヤマハケンブル社での展開を提案。電子キーボード自習書“Self Tutor^{注-2}”が承認され、出版された。



・メソッドの普及

“Self Tutor”はフランクフルト・メッセでの展示などされたが、企業内展開で終わって。

2. 日本におけるタテ線譜メソッド展開

・昭和音楽大学生涯学習センター

日本では、五線譜による教材が一般化しているためタテ線譜の問題が表面化することはなかった。このような中で2010年、タテ線譜を使った講座が昭和音楽大学生涯学習センターで企画され、現在、同学付属教室で継続されている。

・長谷工有料老人ホーム武藏浦和

入居者のQOL（生活の質）の向上を目指して、90歳代、80歳代を対象としたタテ線譜メソッドによるレッスンが2019年10月にスタート。しかしコロナ禍のため中断があり、現在も中断中。

・さいたま市南区役所老人ふれあいセンター

ここでは、シニアの人たちの健康寿命延伸を目的に昨年11月からタテ線譜メソッド「いきいきふれあいミュージック」がスタート。5月に「6ヶ月終了記念クラスコンサート」が開催された。

3. 脳科学者の評価と今後の課題

日本における老人ホームや老人ふれあいセンターにおける行動を知ったミュンヘン大学教授で6分野の博士号をもつW.マストナックから高い評価を受け、ドイツのResearchGate（学者・研究者向けのソーシャル・ネットワーク・サービス）に紹介される段階にまでできている。

今後の課題は、今年度のタテ線譜・ユリディス部会のテーマ「すべての人々に演奏の喜びを-I」に向かって、前述2.の実験室的トライアルをプロトタイプに高めていくことである。

注-1 別名、ピアノ鍵盤譜。打鍵する音そのものがピアノ鍵盤を図式化したタテ線譜上に示されており、それを鍵盤上に移行して演奏する記譜法

注-2 アメリカ最大手の楽譜出版社、ハル・レオナルド社（HAL LEONARD）から1985年に出版

タテ線譜メソッドの音楽療法上の意義について

橋川 琢

(作曲家、文部科学省音楽療法専門士、雑誌 季刊「音楽の世界」編集長)

昨年度(2021年)の「キーボードと音楽療法の現場での一場面、QOLについて」をシリーズのⅠとして、今年度(2022年)はそのⅡと位置づけたものとして「タテ線譜メソッドの音楽療法上の意義について」を発表する。

タテ線譜メソッドとは、阿方 俊氏のタテ線譜(注)を用いた鍵盤楽器導入メソッドである。さいたま市南区役所老人ふれあいセンターにおけるシニアの人たちの健康寿命延伸を目的に昨年11月にスタートしたタテ線譜メソッド「いきいきふれあいミュージック」が行われており、発表者は2022年8月26日実際に見学。終了後阿方氏と意見交換を行い、現場における電子キーボード(と補助機材として紙鍵盤)とタテ線譜の活用について考察した。

さらにレッスンVTR、およびDR.マストナックの反応に対する音楽療法専門士としての視点からQOLについての解説。

上記を踏まえ、そこから見えてくる将来像と課題を考えたい。

(注)別名、ピアノ鍵盤譜。打鍵する音そのものがピアノ鍵盤を図式化したタテ線譜上に示されており、それを鍵盤上に移行して演奏する記譜法(阿方俊氏 研究発表抄録より引用)

《発表予定内容》

- ・「いきいきふれあいミュージック」セッションの概要と流れ
- ・タテ線譜(1) 実際の鍵盤との視覚的親和性
- ・タテ線譜(2) キーボードとの位置
- ・タテ線譜について(3) 譜読みについて
- ・タテ線譜について(4) 音読み、発声での読譜について
- ・現場における電子キーボードの役割
- ・紙鍵盤について
- ・グループでのメソッド実施
- ・DR.マストナックの反応
- ・QOLについて
- ・将来像と課題

演奏を容易にすることを目指した新規な電子楽器の製作

-従来の楽器とは異なる演奏インターフェース-

小出英範 西村明（東京情報大学）

1. 背景

アコースティック楽器、及びそれらを模擬した電子楽器の演奏において以下の難点、問題点がある。

- 演奏が難しく、多くの練習を要する。
- 手入れ、メンテナンスの手間が多い。
- 楽器そのものが高価である。
- 発音原理による制約のため本体の改良が困難。

これらの克服にあたり電子楽器に注目した。電子楽器はセンサの信号を元に演奏音の生成と制御を行うため、発音原理による制約がなく、手入れも容易である。本報では容易な演奏を目指して筆者が過去に製作した「従来楽器とは異なる演奏インターフェースを持つ新規な電子楽器」を紹介する。

2. 電子ハンドベル

ハンドベルは高価であり、演奏には各音名のベルを用いるため多くの台数を要する。筆者は振る動作を検知する加速度センサと音高操作用のタクトスイッチにより、片手で2オクターブの演奏ができる図1の電子ハンドベルを製作した[1]。しかし、演奏者からは本体を振ると同時にタクトスイッチの押下による音高操作を行うことが難しいと評価された。



(a)全体



(b)タクトスイッチの配置

図1 電子ハンドベル

3. 新規な電子楽器の演奏練習実験

電子ハンドベルでの演奏の難しさを受けて、初めて触る段階でも正確に演奏できる、あるいは早期に上達できる「新規な電子楽器」の製作を目指した。演奏しやすい電子楽器の特徴を検討するため、複数の新規な電子楽器、及び比較対象の鍵盤楽器を対象とした演奏練習実験を実施した[2]。実験対象楽器の演奏音を分析、比較した結果、演奏正確性と演奏インターフェースの特徴について以下の知見を得た。

- 音高を音階で制御して、かつコントローラ上で認識できることで音高操作が容易。
- 単一の動作で発音と音高を操作すると発音操作が容易。
- 触る、握る動作は振る動作よりも発音時刻が正確。
- 動作範囲が小さすぎると正確な演奏が困難。

同実験で実験対象とした「グローブ型電子楽器」は鍵盤楽器と同程度の演奏正確性が確認された。また、「タブレット型電子楽器」は鍵盤楽器と同程度の上達の速さも確認できた。

4. グローブ型電子楽器

図2のように布手袋に電気を通す「導電糸」で刺繍が施してあり、それに触ることで発音する。左手用手袋の手の平には長さ30mmの直線状の刺繡が16個あり、8個ずつ10mmの間隔で平行して2列に並んでいる。親指側の8個の刺繡は手末端側からド・レ・ミ…高いドの順に1オクターブ全音階に対応する。小指側の8個の刺繡は隣り合った全音階の半音上の音名に対応する。右手用手袋の人差し指の先端には7mm×3mmの帯状の刺繡があり、左手の刺繡に触ることで、対応した音名の音を発音する。刺繡により音名を視覚で認識して、更に手の平の触覚でも音名を認識できるようにした。

5. タブレット型電子楽器

図3のようにタッチパネルに各音名に対応する色分けした四角のマークを環状に配置して、そのマークに触ることで発音する。発音したら指を離すまで発音を維持する。触ったまま指をスライドして他の音名のマークを触ると、その音名の音に切り替わる。これにより1本の指で触る、もしくは任意で指をスライドする動作のみで演奏できる。各音名のマークを環状に配置したことによって、音階において隣接していない異なる音名にも指の短い移動距離で切り替えができる。



図2 グローブ型電子楽器

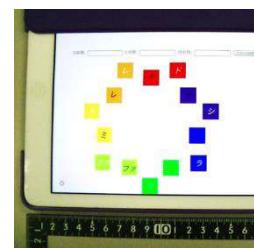


図3 タブレット型電子楽器

6. 今後の研究

演奏を容易にする新たな手法として、新規な電子楽器の演奏練習支援システムの製作を計画している。また、新しい電子楽器の発信方法を検討するための意識調査も予定している。

参考文献

- [1] 小出英範, “音響特微量抽出による電子ハンドベル,” 木更津工業高等専門学校 平成27年度特別研究論文(2016).
- [2] 小出英範, 西村明, “電子楽器の演奏の正確さと上達過程の分析—従来楽器と新規な電子楽器との比較—,” 日本音響学会誌, 78(6), 293-304(2022).